

國學院大學學術情報リポジトリ

Significance and Potential of "Teacher Assistance" by SA, from the Viewpoint of "Improvement of Sociality of Students" : An Analysis of the Student Assistant System at Kokugakuin University

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新井, 大祐, 小濱, 歩, 中條, 豊 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00002105 |

「学生の社会性向上」の観点から見るSAによる「教員補助」の意義と可能性 — 國學院大學におけるスチューデント・アシスタント制度の取組から —

新井 大祐 ・ 小濱 歩 ・ 中條 豊

【要 旨】

國學院大學においてスチューデント・アシスタント (SA) 制度が導入されたのは平成21年のことであり、それからおよそ8年が過ぎようとしている。この間、他の大学では「SA」として学生による教育・授業改善 (学生FD) に携わったり、学生間での学修や学生生活に対する補助 (ピア・サポート) などの活動が展開されているが、國學院大學のSA制度は施行以来、一貫して「大人数授業を担当する教員の補助」に特化する形で運営してきた。

そもそも、「SA」の端緒となった「廣中レポート」における構想では、学生の「責任感」「主体性」といった学生自身の社会性等の向上が期待されたところであるが、「学生FD」「ピア・サポート」という形の「SA」に比して、「教員補助」を旨とする「SA」は、ややもすると「雑用係」に終始し、その結果、学生の資質向上に資し難い、と見る向きもあるが、果たしてそうであろうか。

そこで、本稿では、國學院大學におけるSA制度の歩みを振り返りつつ、その運営の中で得られた学生や教員の意見等を元に、「教員補助」としての「SA」における、学生自身にもたらす効果や影響について考察を加えることとした。

その結果、SAに携わる学生においても、自発的な業務改善やその共有、組織への帰属意識、卒業後の社会を見据えた自己省察などといった、成長の過程のあることを見出した。

【キーワード】

スチューデント・アシスタント (SA) 教員補助としての「SA」 学生の社会性向上、学内ワークスタディ

はじめに

國學院大學では、平成21年、大人数授業を担当する教員の教育効果向上を指向し、スチューデント・アシスタント (SA) 制度を試験的に導入した。その後、修正等を加えつつ継続し、既に約8年が経過している。また、同年は教育開発推進機構 (以下、機構) の発足年でもあった。従って同制度は、本機構、とりわけ教育開発センターとともに歩み、定着した、重要な教育力向上施策の一つと言える。制度の「定着」は、安定的かつ持続的な取り組みの実現を意味する点で喜ばしい。しかし同時に、所期の意義や目的、それに係る様々な議論や経緯

が見失われ、良くない意味で“ルーティン化”してしまう場合もある。

そこで、本稿では、まず、今後の制度の持続と展開を検討する材料として、この8年間のSA事業の経緯を総括するとともに、機構・教員・SAの各視点から同制度の達成と課題を捉え直すこととする。そして、これらの分析・省察を踏まえつつ、本制度が、その本来の目的たる「教員補助」の達成にとどまらず、「学生の社会性向上」をもたらす「学びの場」を提供するという点でも、大きな可能性を有することを明らかにしたい。

昨今、各大学において学生スタッフの取り組み・活動が盛んとなり、多種多様な形

で運営されている。本稿は、本学の事例に基づきつつ、これらの取り組みをさらに発展させる様々な可能性の一例を提示する試みである。

1. 我が国における「SA」概観

本学のSA導入の経緯と展開について述べる前に、それらと関わることでもあるので、我が国におけるSA導入の流れについて概観しておきたい。ただ、それについては、近年、立山博邦氏や竹中喜一氏が簡潔かつ的確にまとめているところでもあるので（立山2013、竹中2015）、ここでは「SA」という語に着目し、その展開をめぐる流れのみを粗々追うこととする。

まず、その考え方自体は、早く平成12年に報告がなされた「大学における学生生活の充実方策について（報告）」（以下、「廣中レポート」と称す）を端緒とする見方が一般的である（立山2013、竹中2015）。

すなわち、それ以前より推進されていた大学院学生に研究・教育の補助業務を担当させるTA等に併せて、「大学院学生だけでなく学部の上級生についても、このような（＝教育の補助業務を担当させる一筆者註一）機会を積極的に与えていくことが望まれる」のであり、さらに「授業の補助を行うだけではなく、下級生の学生生活全般にわたる指導や相談に上級生を当たらせたり、学生を学内における様々な業務にたずさわらせる」ことを通じて、「学生が自立した人間として成長するための訓練として、学生に一定の責任を持たせることが重要」との提案であった。この段階では未だ「SA」という語は用いられていないが、

その骨子は、後のSA制度に通じるものであったことが伺えよう。

その後、やや時を置き、平成20年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」においては、大学に期待される取組として、「授業における指導（例えば、ディスカッション、討論など）への参画、授業外の学習支援など、TAの役割を一層拡大する。優秀な学部学生をSA（スチューデント・アシスタント）として活用することも検討する」とある（下線、筆者。以下同じ）。さらに「貢献に見合った経済的支援が提供されたりするような手立て」の検討を掲げ、国として「学部学生を含めてTA等の活用に対する支援を充実させる」ことなどを進めるべきとの提言がなされている。

以上より、平成20年段階においては、「TA」に準ずる制度として「SA」を位置づけようとしていたこと、さらに、優秀学生への経済支援の一環としても期待されるものであったことが理解されよう。

他方、同年には日本学生支援機構によって「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査」が実施され、翌平成21年に報告がなされているが、その内容は当時及びその後のSAの流れを考える上で重要である。

同調査は学生支援に関するニーズ把握のために、全国の国公私立の大学・短期大学・高等専門学校1217校を対象に行われた大規模なもので、「学生支援組織」「就職支援」など8つの項目立てで実施されたものであるが、そのうちの 하나가「スチューデント・アシスタント（SA）について」という内容となっている。

同調査においてはSAという用語につい

て「学内における呼称に関わらず、学士課程の学生を教育の補助業務や学生支援に携わらせるものを想定」と定義し、その実施状況、従事内容、規程等の整備、従事時間の上限設定、手当支給の各項目について問うている。そして、この段階でのSA実施状況としては、大学全体（短大・高専を除く）としては47.4%が実施との回答であり、ほぼ半数の大学で取組がなされていたことが知られる。

さらに注目すべきは、その従事内容の問いである。内容としては、

- ①修学上の諸手続き等の業務補助（学生の視点に立ったサービスの提供）（19.2%）
- ②授業等におけるパソコンやインターネット等の利用補助（65.8%）
- ③採点、レジュメ・資料作成、補習指導等の業務補助（29.1%）
- ④新生の学修相談（22.4%）
- ⑤障害のある学生への支援（23.6%）
- ⑥留学生の日本語学習支援、生活相談（29.1%）
- ⑦その他（21.5%）

※（ ）は「大学全体」の実施率（複数回答）。

であり、また「その他」については「入学式・卒業式・オープンキャンパス等の学内業務補助」、「図書館業務補助」「大学のサテライト施設の管理・運営」等の回答が寄せられていたことが掲げられている。

また、「学士課程答申」において期待された経済支援という面においては、89.8%の大学が時給800～1,000円の手当等を支給しているとの回答であった。

ところで、前掲の業務内容の内訳を見る

と、「教員補助」としてのSAは厳密に言えば③のみであり、それ以外はすべて対学生の業務である（ただし、最も数値の高い②については、「教員が授業でパソコン等を利用する際の補助」であるのか、「学生が利用する上での補助」なのか対象が不明瞭であり、位置づけが難しい）。

ここから、同機構における「SA」への視点は、「教育の補助業務や学生支援」と定義しつつも、実際には——機関の性質もあろうが——後者の「学生支援」という、言わば「ピア・サポート」としての役割が大きいものとして想定していたことが推察される（現に、本調査に次ぐ、平成22、25、27年度の同趣の調査においては、「SA」について問う設問は消え、ピア・サポート等についての調査となっている）。

以上より、SAの模索期とも言える当該期の方向性としては、「教員サービス」と「学生サービス（ピア・サポート）」の2つの可能性が指向されていたことが理解される。

さらに平成21年にはベネッセ教育総合研究所の『Between』2009冬号において、SAを取り上げた「SA（スチューデント・アシスタント）登板—教育効果向上のために—」なる企画が組まれており、SA制度への当時の注目を物語る動きとして注意される。その中では、前年に出された前掲「学士課程答申」を受けて、学生をSAとして活用する大学が現れているとし、岡山大ほか4校の取組をレポートしている。この4校の取組の詳細は割愛するが、それらレポートから、この当時、各大学においてはSA制度が多種多様な形で展開されていた制度であったことが理解される。

さらにその後、24年8月には中教審答申

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」が公表されている。答申本文中には「SA」という語は見られないものの、付編『用語集』の「ティーチング・アシスタント (TA)」項に、

(前略) 大学院でなく、学士課程の学生を教育の補助業務に携わらせる場合、TAとは区別してスチューデント・アシスタント (SA) と称することが多い。

と見えており、平成20年の「学士課程答申」より4年を経て、大学におけるSAが一般化しつつあった状況を示している。

さらに、同年には日本私立大学連盟『大学時報』において、「スチューデントアシスタントのさらなる活用」という小特集が企画され、立命館大ほか4校のレポートが掲載された。「質的転換」答申と併せ、そのタイトルからも、当時においてはすでにSA自体がある程度の認知度を持ち、様々な大学で展開されていたことが理解される。

以上、SAに関する時流を概観してきたが、以下のことが理解される。

すなわち、「SA」というものがTAに準じるものとして認識され、「学士課程」答申とも相俟って平成20年前後より注目を浴び、各大学で運用が活発になっていった⁽¹⁾。ただし、TAが「技能修得・研究者育成」「奨学制度」という明確なビジョンを有する制度であるのに対し、SAは些か漠然とした文脈の中で構想されていったものである。その名称をとってもTAが「教授・教育のアシスト」という明確な目的を冠したものであるのに対し、SAは明確な目的が示されているわけではなく、“学生スタッ

フ”という極めて広範に亘る制度として認識されていた。その結果、各大学のニーズや状況に即して導入・運用され、その名称も直接的に「SA」とはせず、独自の名称を使用している大学も少なくないという状況に至ったのであった。

その一方で、これまで種々報告がなされてきた各大学の取組を概観すれば、実際にはその方向性は概ね「ピア・サポート」「教員補助」「学生FD」という3つのあり方のいずれか、あるいはその複合型に収斂されよう。ただし、実際には、教員の効率的な授業運営のための出欠確認やプリント配布、宿題回収といった「教員補助」の「雑用」に従事させる大学が多く、その出発点であった「廣中レポート」における構想とかけ離れている、との指摘もなされている点(立山2013)は注意されよう。

2. 國學院大學におけるSA制度導入の経緯

2.1 國學院大學SAの出発—第1期トライアル—

それでは、國學院大學におけるSA導入の経緯と展開について述べてみたい。

本学におけるSAの導入は平成21年からであり、その際は、後の本格導入を検討するための試験的導入(トライアル)として実施されている⁽²⁾。そもそも、同年は4月に本機構が発足した年であり、従って、SA制度の導入検討は、発足に際しての教育力向上の“目玉施策”として模索されたものであった。

「SA」はその従事する内容が広範に亘り、各大学の置かれた状況等に即した形で導入

されていることは前述の通りである。この平成21年度段階において本学は（それ以前からのことではあるが）毎年一定数出来てしまう「大人数授業」（本学においては「履修者が300名を超える授業」）をいかにするか、という問題に直面していた。受講者数が多ければ多いほど授業における教育効果が減退していくことはすでに言い古されたことではあるが、5つの学部、1万人超の学生を抱える本学において如何ともし難い「大人数授業」の教育の質の保証をいかに進めていくかという課題を抱えていた。こうした問題を受けて本機構が案出したのが、学生による「教員補助」システムとしてのSAであり、FD・授業改善を担う教育開発センターを中心にSA制度の導入についての議論を進めることとなった。その際、当然ながら「大人数授業」における問題点の精査と同時に、履修者が何人であろうと教員自らが行うべき責務といった観点からの議論が進められた。

こうした中、大人数授業において教員が負担を感じているものとして、1) 資料の配布・印刷だけで多大な時間を要すること、2) 出席カード等の回収に時間を要すること、3) 出席カード等の整理に手間と時間がかかること、4) 大教室で行うためプロジェクターなどを用いて授業を進める必要があること、などが挙げられた。中でも、配布・回収や機器のセッティングは授業時間中に行わざるを得ないために、実際に授業を行う時間が大幅に減少してしまい、「授業時間の確保」といった観点においてもその対応が重要であることが再認識された。

反面、試験監督や採点など、学生の成績や評価に関する事項は、やはり厳密さを伴

う業務であり、学生が着手すべきではないこと、学生への注意といった授業中の良好な学修環境の確保も教員の重要な責務の一つであり、それをSAに行わせると学生間のトラブルが想定されること、さらに大前提として、SA学生自身の学業に支障のないような制度とすること、などの点についても意見が呈された。

以上の議論を経て、試験的に導入するという方針の下に、第1期トライアルとして、SAが従事する業務等を以下の通り設定した。

【業務内容】

- (1) 教材・資料の準備補助（印刷・運搬のみ）
- (2) 授業時の教材・資料の配布
- (3) 出席カードの配布・回収・整理
※整理は授業中に限る
- (4) 通常授業時のコメント・ペーパー等の配布・回収
- (5) AV機器等の運搬・設定準備や操作
- (6) 授業アンケートの配布・回収・整理
※整理は授業中に限る
※以上の業務以外は教室内で待機し、教員の指示や不測の事態等に備える。

【禁止事項】

- (1) 成績評価に関すること（採点関係業務・コメント執筆・評価決定など）
- (2) 試験監督業務（授業内で行う中間試験・学年試験等には一切不関与）
- (3) 受講生の受講態度等に対する注意等
- (4) 受講生の個人情報を知りうること（例：出席カードの出席簿への

転記など)

(5)教材の作成作業(印刷・運搬以外)

なお、この第1期において定めた従事事項等については、現在に至るまで大きな変更はなく踏襲されている。

以上の制度設計を終え、次いで具体的な運営準備の着手へと進んだ。

まず最も重要となるSA学生の確保については、試験運用という点に鑑み、すでに教務部に設置されていた「エルダーサポーター」⁽³⁾の採用学生に対して参加・協力を要請し、7名の学生の協力を得ることとなった。

また、対象授業についても、やはり試験運用であることから、「履修学生200名を超える授業を担当する専任教員」という点に絞り、その中で、10名(延べ14コマ)の教員に対して試用協力を依頼した。

さらに、手当(給与)を支給すること、SAは定められた教員に固定的に支援をすること、基本的に従事時間中は担当授業の教室において待機すること、などを定めて運用を開始した。

以上のような形で半年間試験運用を行い、終了後にSA学生にレポート提出を課し、また参加教員に対してアンケート調査を行った。

その内容については後述するが、この教員に対するアンケートの中でその後の制度設計上特に注目したのが、「SAが授業時間を通じて教室にいる必要はあったか」という点である。すなわち、前掲の通り、従事時間中は教室内において待機することとして運用を開始したが、アンケート結果を見ると、半数以上が「待機は不要」、「時に応じて必要」と回答した。すなわち、SAに期待する業務としては、授業冒頭の資料配

布、終了前の回収作業の必要性が最も多いため、結果「それ以外は不要」という意見であった。

さらに運用中に見えてきた問題として、学生を固定的に教員へ一対一で担当として“貼り付ける”という様態について、当該学生に対しては自身の履修授業を勘案してコマを割り当てたが、実際には当然ながら授業以外にも所用は出来るし、体調を崩すこともある。そのような場合のリスク・ヘッジをいかに解決するかということも課題となった⁽⁴⁾。

さらに、最初期の試行ということから既存の学生スタッフを充てたが、今後の人員確保についても模索が行われた。

2.2 現行制度の端緒—第2期トライアル—

以上の第1期において浮上した課題を受けて、22年度前期に第2期のトライアルを実施することとし、課題の解決を図るとともに、新たに試行的取組を行うこととなった⁽⁵⁾。

課題の克服や改善については、本格運用を行う際、「人数確保が適切に行えるか」という点を把握するために、採用期間を半期とする公募(2年生～4年生。留年者等は対象外)を実施することとし、審査の結果、27名のSA参加者を確保するに至った。

また、採用者に対しては、業務上必要となるAV機器や印刷機の取り扱い説明、従事事項等の周知徹底などを行うための事前研修会への参加を義務づけることとした。さらに、その従業形態について、第1期における担当授業の固定という方法を廃し、授業時限構成に合わせたシフト制(1シフ

ト＝授業開始20分前～授業終了後10分の2時間)を採用することとした。

さらに、授業時間中の教室内待機の必要の有無については、トライアル参加教員(原則として履修者250名以上の授業を担当する専任教員)に対して事前に確認を行い、その結果、多くの教員から「冒頭の機器セッティングや資料配付、終了前の記入物の回収のみで良い」という回答を得た。

このような結果を受けて教職員の調整の元でシフト表を作成し、各シフトコマに授業規模に応じた数のSAを配置した。さらに、メーリングリストを立ち上げ、担当学生がやむなく従事できない場合は、職員が他のSAにメールで呼びかけを行い、代替者を確保する仕組みを構築した。また、待機不要という教員の授業においては、授業冒頭の配布作業等が終了した時点でSAを作業スペース(機構内に設置)へ戻らせ、その間、翌日以降の授業資料の印刷や、他の授業で回収した出席カード等のソート作業などに従事させることとした。

こうした第2期における「事前研修会」「公募制」「シフト制」「予備要員の登録」「メーリングリスト活用」「授業中の別作業への従事」という施策は、「資料印刷や回収物整理に従事させる時間の確保」、「非常時の代替要員の確保」などといったそれまでの課題に対し、効果的に機能した。

これらの仕組みは、その後も現在に至るまで踏襲されており、概ねこの第2期において、現在の本学SA制度の骨格が定まったと言えよう。また、この第2期においては、期中に開催する「中間報告会」と期末に行う「最終報告会」を設けて、各SAが日々業務に従事する中で直面した問題や、

業務の改善案などをSA及び担当教職員間で共有する取組も開始し、これもその後のSA制度に受け継がれている。

ところで、この「中間報告会」「最終報告会」、あるいは日々の業務においても、SA達が非常に活発に議論や意見交換を行ったり、経験に基づく自分なりの業務改善案を提示したりした。SA制度というものに誇りを持ち、自分たちでより良いものとしていこうとする姿勢を見せる学生が多数に亘り、日々の業務の中で、学生に「帰属意識」や「責任感」、「自主性」というものが芽生えていることに教職員が気付かされることも多かった。ここから、SA制度が単なる「教員補助」ではなく、参加学生に対しては、社会的成長に資する可能性を有した制度であることも認識されたのであった。

2.3 本格導入への最終調整—第3期トライアル—

前節の通り、第1期において浮上した種々の課題は第2期において概ね改善されたことが確認されたことを受け、正式導入に向けた最終調整として、第2期の運用方法をほぼ踏襲した形で第3期トライアルを平成22年度後期に実施した。

なお、この第3期においては、その後の正式導入を見据えて、その際の想定条件と同様の「履修者300名以上の授業(専任、兼任(非常勤)教員を問わない)」という形を取った。この結果、SA配置授業はこれまでを大幅に上回る25コマとなったが、他方、公募によるSA採用者は35名となり、1授業に2名以上の学生を配置しうる十全な支援体制を構築することができた。

ところで、この第3期において特筆すべきは、本来業務とは異なる、SA学生達の自発性を根底とした制度の広報活動である。具体的には、本機構において発行する『教育開発ニュース』において「SA企画」のページを設け、SA学生が企画する記事を掲載するという試みであった。そこで、SA学生にその趣旨を伝えて有志を募ったところ11名の学生が応え、教職員と相談をしながら企画を進め、その結果、SA学生が自身の経験をもとに、良い授業・悪い授業の事例、教員の工夫や授業改善案などについて語り合う座談会を実施し、その内容を「学生視点で大学授業を考える」という記事として掲載する運びとなった。

このニューズレターの「SA企画」は、その後も毎年度冬号の企画として継続し、計5年に亘ってシリーズ化された⁽⁶⁾。とくに、Vol.5の「ハッピースクールライフ」は、学生（とくに新入学生）に対して、SA学生達が自らの経験をもとに、大学における基礎的な学修方法をレクチャーする内容であり、vol.7掲載「図書館なんてコワくない！」も、学生が図書館に取材をしながら、その利用方法を学生目線で紹介した内容となっている。

これらは本学SAが「教員補助」のみならず、「学生FD」や「ピア・サポート」という面においても、その可能性を有した存在であることを物語る事例と言えよう。

2.4 正式運用の開始

以上、計3回、一年半に亘る試行期間を経た後、その間の制度利用教員や参加学生のアンケート、各種事例をもとに、その効果検証を行い、その結果、「教員補助」に

特化した制度として、対象とする授業や業務内容、SA学生の選定や待遇を規定した「SA（スチューデント・アシスタント）制度運用に関する内規」を作成した。内規は平成23年3月に教育開発推進機構運営委員会において承認を受け、同4月より、内規に基づいてSA制度を正式に運用するに至った。そして、これ以降、軽微な修正等を行いながらも、SA制度は平成28年度の現在まで教育開発センターにおける重要な授業支援事業として推進されている。

こうした中、とくに注目すべき点として、(トライアル期からのことではあるが) SA業務を通じて参加する学生自身の責任感や自主性などといった社会性の向上、すなわち「学生の成長」が顕著に見られたことが掲げられる。これは、当初「教員補助により大人数授業の教育効果を向上させる」という点のみに目を向けていた我々教職員にとっては歓迎すべき成果であった。そして、この「学生の成長」をめぐる重要な動向として、平成26年度に全学的に「学内ワークスタディ」を定めることとなった点には言及しておきたい。

本学内には、すでに各部局において、大学の各種活動をサポートするための学生チームを設置していた⁽⁷⁾。しかし、それらは各部局が独自に運営し、統一的な目的を標榜したものではなかったというのが実態であった。そこで平成26年に「学内ワークスタディ」を定めて内規を制定し、「学生が学内における教育支援活動や学生自身の社会性向上に資する活動」で、かつ「経済支援」も目的とするものと定義し、従来の学内における各種学生スタッフをこれに位置づけた。その中においては、SAも他の組織と同様に位置づけられ、その運営の

中で芽生え、培われてきた「学生の社会性向上に資する」という点が、制度上も明確化されることとなったのである。

2.5 運営側(機構)から見た今後の課題

以上、本学におけるSA制度の試行的導入から正式運用までの流れを概観してきた。

本節の締めくくりとして、平成28年度現在、制度の運営側(機構)から見た課題として2点を挙げる。

第1に、SA配置の要望が増える一方で、SA志望者(特に2年次生)のエントリーが伸び悩んでいる。幸い、人員不足が原因で支援を断る事態はいまだ出来していないが、学生に向けてSAの魅力を発信し、志望者を増加させることが求められる。

第2に、スキル習得やノウハウの共有・継承について、SA同士の日頃の教え合いや、報告会で進められてはいるものの、次のような問題も浮上している。①毎回の報告内容がマンネリ化する傾向がある、②報告会の参加者が少ない回がある、③新規採用SAに情報が十分共有されない場合がある、④業務の推進やチームワークの形成について中核となって牽引するメンバーが減少しつつある、⑤業務マニュアルの改訂の必要がある、等である。

もっとも、これらはSA達自身にも十分自覚されており、28年度前期は、3・4年次生中心に、①報告会の進行や報告内容の見直し、②新規採用者への参加の積極的呼び掛け、③新規採用者への引き継ぎをスムーズにするための作業マニュアルの充実等、自主的に改善を進めようとする動きが出て来た。教職員としてはこれらの動きを歓迎するとともに、適切な支援を行ってゆ

きたいと考えている。

ここからは、本学SA制度の効果・意義と、今後の展望について、より具体的に省察を進めて行くこととする。

まず制度を活用する教員側の視点から、次いで補助を提供する学生側の視点から、それぞれ制度の利点・意義と課題とがどのように捉えられているかを、アンケート調査の結果等に基づいて具体的に検討する。その上で、運営側(機構)・活用側(教員)・提供側(SA)それぞれの視点を総覧する中から見出せる、本学SA制度の意義と、今後の展望をまとめてみたい。

3. 活用側(教員)の反応 —トライアル期・平成28年度のアンケート調査から—

SA制度は、平成21年度後期・22年度前期・22年度後期の3期にわたりトライアル運用を行う中で、教員対象にアンケートを実施してきた(資料1参照)。以下、その結果に基づき、活用側(教員)がSA制度について高く評価した事項と、課題として指摘された事項を概観する。なお、平成28年度後期にも、SA制度の現状と課題を把握するため、継続的にSAを利用してきた教員を対象にアンケートを実施し、9名から回答を得ている(資料4参照)。件数は少ないが、直近の状況を示す資料として、適宜参照したい。

3.1 教員によって指摘されたSA制度の効果・長所

まず、教員から高い評価が得られた事項として、以下3点が挙げられる。

①作業負担の大幅な軽減効果

トライアル1期に協力を依頼した教員10名中9名が「授業負担が軽減された」と回答し、特に授業準備の時間確保、資料配付の時間的・労力的負担の削減を評価する声が多数を占めた。負担軽減に伴い、教材の追加や、視聴覚教材等の使用が容易になったとの回答もあり、SA制度それ自体の必要性については、ほぼ全教員が肯定的であった。この点は平成28年度アンケートでも、回答した9名全員が「負担が軽減された」としており、SAによる作業補助の効果は一貫して高い評価を得ている。

2期アンケート（大教室系授業）においても同様であり、AV機器の準備や操作代行、教材印刷作業の請負、配布物の回収とソート等の業務による負担軽減効果に加えて、授業準備・片付けや、出欠の厳格なチェック、机間巡視の時間を確保できたという声があった。

②教育効果向上のための取り組みを促進する効果

2期アンケートには、SA制度に大規模教室における教育効果向上のための多様な取り組みを促進する面があることを示す回答が多数見られる。たとえば、作業負担の軽減に伴い、これまで断念していたレポート課題の出題に踏み切ったところ、250名以上の授業であるにも関わらず、50名規模のクラスと同程度の理解度が実現できたとの報告がある。他に、視聴覚教材の積極的利用、配付資料の増加、コメントペーパーの活用、授業時の小試験の実施等の事例がある。小試験については、大規模授業では困難な複

数回の実施や、双方向授業の試みへの応用が可能ではないかとの指摘もなされた。

平成28年度アンケートにおいても同様に、「躊躇なく課題を課すことができる」「授業運営に専念することができる」「授業計画通りに進行できる」「出席確認の確実性が増した」「コメントペーパーの整理が楽になった」「授業時間の確保ができた」等の回答が寄せられた。

③作業に従事するSAの業務に対する真摯さ・丁寧さ・積極的態

3期アンケートでは、SAの業務に対する態度や作業の質等について意見を求めた。教員からは、礼儀・身だしなみ等が他の学生の模範になるものであった、てきぱきと業務を進めてくれたため気持ちよく授業が行えた、AV機器に不具合が生じたときに臨機応変に対応してくれた等の声が寄せられ、全般的に極めて好意的な評価であった。この傾向は平成28年度も変わらず、「非常に真面目な学生が配備され、業務を遅滞なく進めてくれた」「真摯かつ丁寧な態度であり、全く問題点を感じさせない」「前回の授業で依頼した事柄を次回以降も継続して行うなど、業務に対する意欲と応用力がある」「出席カードに関わる不正防止の方法を発案・実行するなど積極的な態度が大変好ましい」等、真摯さ・丁寧さ・積極性の面が高く評価されている。

3.2 教員によって指摘された問題点・課題

一方、課題としては主として以下の3点を挙げることができる。

①対応する業務の範囲・禁止事項の明確化と、その周知徹底の必要

2期アンケートで、回収した小テストの答案ソート作業を依頼したところ、引き受けるかどうかの判断がSAによって異なり当惑したとの声があった。これは、機構で、SAは成績評価に直接関与する業務は行わないとの方針をとったものの、当該依頼を評価と無関係な作業として捉えるか、それとも評価対象となる答案に直接接触れること自体避けるべきと捉えるか、SAによって判断に相違があったことから生じた混乱である。業務の取り扱い範囲と禁止事項を明確化する必要が認識された⁽⁸⁾。

②SA間の作業に対する能力・習熟度の差の解消

1期アンケートで、教材配布等についてより効率的な方法を検討すべきとの指摘があった他、2期では教材やアンケート用紙の配布のタイミングについて、教員の指示を守らなかったため意図に反する結果になったことが1件報告されている。また、作業の質が、配置されたSA個人の質（経験や資質）に依存するとの指摘も1件あった。3期においても、SAによってAV機器操作等に不慣れな場合が見受けられるとの指摘があり、ノウハウの共有・継承を強化する必要が認識された。

③担当教員とSAとのコミュニケーション・連携の強化

3期アンケートでは、教員側の指導・指示の在りようによってSAの勤務態度や作業内容は変化するとして、教員とSAとのコミュニケーションをより密にする必要が

指摘されている。

以上の指摘を受け、機構では、既に述べたように、内規策定や説明会・報告会による業務内容と禁止事項の周知徹底、および作業補助に関するノウハウの共有に努めることで対応を行った。この試みは相当の効果を上げたが、今後もその努力を継続・強化して行く必要があることは言うまでもない⁽⁹⁾。

成果③に顕著なように、SA個々人の業務に対する責任感や主体的・積極的な姿勢が、授業補助の質を大きく向上せしめる要素となっており、かつ、教員のSA制度全体に対する評価を大きく左右するポイントでもあることに気づかされる。学内ワークスタディとしての本制度の意義を考える上で、この事実は重要である。

4. 提供側(SA)の自覚 —トライアル期レポート・平成28年度のアンケート調査より—

続いて、SA業務に従事する学生自身が、どのような意義や課題を感じているかを検討する。機構は平成22年度後期（トライアル3期）と23年度前期（正式運用開始後1期目）に、当時の全SAを対象に「SAをやってみての感想と気づき」というテーマで簡易レポートを提出させており、以下これに基づいて述べる（22年度後期32名、23年度前期24名）。詳細な結果は末尾掲載の一覧表を参照されたい（資料2、3）。

また、平成28年度後期に、複数学期にわたり業務を継続しているSAを対象として任意でアンケート（記述式）を実施し、11名から回答を得た。直近の状況を示す資料

として補助的に考察に加えたい（資料5）。

4.1 SA側から見た制度の意義・成果

①教員・職員・学生間の交流

SAとして働く中で最も意義を感じたこととして、他学部・学科の学生や、教職員との交流を挙げる回答が最多であった（平成22年度46.9%・23年度33.3%）。交流は単に業務上の連携にとどまらず、大学生生活全般にわたる。たとえば学生同士の場合、3・4年次生が2年次生に対して学業や学生生活上のアドバイスをしたり、他学部・学科の学生と互いの専門分野の内容について語り合ったりするなど、大学での人間関係が広がったとの報告が見られる。また、業務の中での教職員との対話や協働自体が刺激になったという趣旨の回答も多かった。

②大学の教育改善の取り組みへの参加

トライアル期の総括となる22年度後期レポートで顕著であったが（19.4%）、大学の教育活動・授業改善に参加する経験を挙げる学生が多く見られた。殊に、ニューズレター上でSAと教職員が集って行われた、授業改善やSA業務に関する座談会等の企画に参加したり、SA制度の運用方針策定を教職員と相談して進めたりすることを通して、「制度を共に作り上げて行く」充実感が得られたことを重視する回答が多かった。

③大学の教育・授業に対する視野の拡大

業務や教職員との交流を通して、大学の授業に対する見方、自身の学ぶ態度に変化があったと回答したSAも少なくない（22年度15.6%・23年度8.3%）。授業補助は、教職員と連携しつつ進める言わば「裏方」的

業務と言えるが、そうした「裏方」から教員の事前準備の様子や、教材・教授法に工夫を凝らす姿を目にすることで、「授業を受けるだけの学生目線」を脱した、あるいは自分が履修している授業への受講態度が変わった（コメントペーパーに、より丁寧に回答するようになった等）との回答が見られた。

④作業補助を通じての達成感・貢献感

補助業務それ自体の意義として、補助を通じて教員の負担を軽減し、授業の充実度を高めることで、他の学生に対しても貢献できたという達成感があるとの回答も見られた（22年度12.5%）。他に、出席カードの配布方法など細々した作業の効率化や、新たな工夫について教員に提言を行い、授業運営の役に立てた体験を報告する者や、受講していた友人や他の学生から感謝されたり、協力が得られたりしたことを報告する者もあった。

⑤事務作業に関するスキルの習得・向上

印刷機の操作、紙の裁断、資料の配付回収と整理、教職員や学生相互の連携に伴う「報・連・相」、報告会等の運営、情報共有のための資料の作成や口頭報告等を通じて、事務的なスキルを習得できたとの回答が複数見られた（22年度6.3%・23年度8.3%）。また、こうしたスキルが就職活動を進める上で有益と感じたとの声もあった。

⑥社会性の向上・大学への帰属意識の伸長

件数自体は少ないが、特に平成22年度のレポートに「業務に対する責任感の向上」「教員に授業運営についての提言を行った」

「学内での『居場所』ができた」等、SA自身の責任感や積極性の向上を示唆する回答や、単に授業を受けに来る場所としてではない「自分の居場所としての大学」という帰属意識の伸長を窺わせる回答が見られた。平成26年度の学内ワークスタディとしての位置づけに先立つ段階で、既にこうした実感がSAの間で語られていることは注目すべきであろう。

平成26年度以降は、公募の際にワークスタディの趣旨を告知するとともに、志望者に対しても説明・確認を行っていることから、こうした意識は更に高まりを見せつつある。たとえば、平成28年度アンケートの志望理由を問う欄への回答では、通常のアルバイトと異なる、大学教育の支援活動としての面を念頭に置きつつ「教員志望なので、より近くで教育という現場に携わりたい」「先生方の授業補助をする経験が自己の成長につながると思ったから」「コミュニケーション能力を高めるため」「学生として大学教授や講師の方の補佐ができるという点に興味を持った」等、学校の教育活動に関わりたい、あるいはそうした活動を通じて自己の能力を高めたいという志向性が一層強く感じられる傾向となっている。

また、同アンケートの「SAになってよかったと感じること」や「業務の中で工夫していること」を問う設問への回答を見ても、「物事に対する責任感」を感じるようになったことや、教職員との交流の中で「言葉遣いを意識」し「社会に出る上でも大切なこと」と自覚するようになった、などの回答が見られる。

業務の中で様々な教職員と関わり、その要望に対応する中で、コミュニケーション

能力を高めることの重要性を認識する者や、「担当する教員や学生などの他者の気持ちを考え行動するように心掛けている」との声も寄せられており、他の学生や教職員との関わりの中での社会性の向上を見て取ることができよう。

4.2 SAが挙げる課題・反省点

①業務で得られたノウハウや情報の蓄積・共有・継承

課題として圧倒的に多くを占めたのが、業務上のノウハウをどのように共有・蓄積・継承するかという問題である（平成22年度43.8%・23年度58.3%）。SAは種々の業務を経験し、時に備品不足や機器トラブル等に対処する。従って、業務内容・対象授業の特色・担当教員の授業の進め方・過去に直面したトラブルの事例とその対応例などを共有し、交替する際は引き継ぎ事項の伝達も必須となる。トライアル期にはその方策が十分固まっておらず、教員からもSAによる作業効率の差や引き継ぎ事項の伝達漏れなどが指摘された例もあった。

SA間でも早い時期から対応の必要が自覚され、対面で引き継ぐだけでなく、「業務ノート」を作成して本部ロッカーに保管し、これに各授業の業務内容やトラブル対応事例等を記入し、全SAが参照できるように工夫がなされた。また、掲示板・黒板を使って引き継ぎ・注意事項・予定変更等を共有する手立ても取られた。

情報共有や引き継ぎは、単なる伝言では不十分であり、その正確性や確実性を担保するために一定のノウハウが必要とされるものである。しかし、特にトライアル期にはその自覚がまだ十分でなく、試行錯誤の

状態であったことが、SAの危機感となってレポートの内容に強く現れたと考えられる。

平成28年度現在は、業務ノートの作成・共有、黒板や掲示板の使用、期中期末の報告会等、諸々の方法が確立・定着し、事態はトライアル期に比して大きく改善されている。とはいえ、28年度アンケートでも、個々の作業を手がける中で、段取りやタイミング等で困ったこと・失敗したことがあったとの報告は少なくなく、こうした個別事案への対応を協議し、共有して行く方策として、業務ノートや報告会の重要性は今後も変わらないであろう。

②授業担当教員とSAとの間のコミュニケーション・連携の緊密化

続いて多く挙げられた課題は、支援対象授業の担当教員とSAとの間のコミュニケーション・連携の強化である（平成22年度21.9%・23年度20.8%）。SAが担当教員の指示を十分理解しなければ、当然授業運営に支障を来す。また、突然の休講や教材変更等が生じた際に、情報が速やかにSAに伝達される必要があるし、配置シフト変更や欠勤者の代行業務の際には、改めて教員との打ち合わせが必要となる。

この点についてSAからは、SA同士の情報共有に加えて、特に担当教員と授業前に事前打ち合わせを行うことを心がけることでミスやトラブルを極力回避すべきとの意見が寄せられた。また、教員とSAの信頼関係を形成するため、初回業務時に丁寧な自己紹介するなど、個々のSAが教員にとって「顔が見える」存在となる必要があることを指摘する声もあった。

なお、平成28年度アンケートで事例とし

て最も多く寄せられたのが、この「担当教員とのコミュニケーション」である。指示を誤解なく実行することの大切さもさることながら、特に多かったのが「SAの業務内容を越えた要望をされた場合の対応」に関わる事例であったことは、運営側としても、SA配置の際に担当教員に説明を徹底すべきところと反省させられた。教員側のSAに対する期待の大きさの裏返しとも言えるが、今後の課題である。

③SA同士の業務に関する相互連絡の緊密化

業務の中でSA同士が緊密に連絡を取り合うことの重要性も指摘されている（平成22年度9.4%・23年度20.8%）。特に、担当SAの体調不良等で代行が必要となった場合、機構の教職員への報告をいち早く行うと共に、SA同士が緊急で連絡を取り合うための手段が必須であった。この点は平成22年度前期より、SAと担当職員が共同でメーリングリストに加入して連絡を取り合う方策が採られ、現在も踏襲されている。

ただし、トライアル期には時折、連絡漏れや、不明瞭な文言で送信したため意図が十分伝わらない事態が生じたことから、ここで課題として挙げられたものと考えられる。現在は、メーリングリストの利用方法を選考時の説明会で配布して説明を行っており、あらかじめ想定される事態に応じた文例と、送信時の書式を示すことで、明確な意思疎通に努める方策が採られている。SA同士の連絡における問題は平成28年度時点ではほとんど指摘されていないことを見ても、効果があったと言える。

④シフトの配置や時間の調整

人員の配置方針はトライアル期の試行錯誤の中で徐々に固まってきたものであり、そのため授業によっては業務内容に対してSAの人数が多すぎて手持ちぶさたな者が出るなどの事態が生ずることもあった。トライアル期のレポートで、SAから人員の配置や時間の調整が課題とされているのは、そうした事態を受けてのことである(平成22年度21.9%・23年度16.7%)。平成28年度現在は、おおむね300名～400名程度の授業に対しては経験者1名と新人1名の計2名配置を原則とし、履修者数の増加や作業量の多さに応じて適宜増員を行っている。本学の大教室の定員からして、最大規模の授業は通常600名程度となるが、4～5名が適宜業務を分担して従事している。

⑤教員・学生に対する広報活動の必要性

トライアル期はSA制度自体の認知度が低かったため、SAの業務内容や利用方法について教員に一層周知が必要と指摘されていた(平成22年度15.6%・23年度4.2%)。また、一般学生からも授業の作業補助を行うスタッフとして認識されていない状況があったため、作業スタッフとしてのSAの存在を視認しやすくするため、ブレザーや帽子などの制服を定めてはどうかとの提案もSA側から寄せられている。これを受けて、現在は専用のジャンパーを全員が着用して従事しており、制度の周知に一定の効果を上げている。

ただし、SAの存在は認知されても、その役割について教員や学生から十分な理解が得られているかはまた別の問題である。平成28年度アンケートにおけるSAの報告では、一般学生から見ると、SAは〈TA

や職員のようなもの〉という認識であり、授業内容について説明を求められたり、学内の諸手続きや評価方法について質問されたりすることが多いとのことであり、一般学生向けの広報という点が課題である。

⑥SA同士の交流・懇親

シフトによっては互いに顔を合わせる機会がない場合もあるため、懇親会等を通して交流・親睦を深めたいとの要望も複数寄せられた(平成22年度6.3%・23年度4.2%)。SA制度の利点として、他の学生や教職員との交流を挙げた学生が多いことと表裏をなす傾向であり、SAの自発的交流の後押しを含め、今後注力すべきであろう。

⑦授業運営上の問題点の気づき、指摘・提言を行いたいという要望

SAが業務に従事する中で、支援対象授業の授業運営や作業効率の問題点に気付くこともある。SAの業務内容には、授業改善に関する提言を行うことは含まれていないが、担当教員との信頼関係の中でSAが個人的に改善策の提言を行い、教員がそれを採用して実際に作業効率等に良い影響を与えた事例もあった。

実際、SAの中には、補助作業を通して気付いた問題点について教員に意見を具申したり、改善策を提言したりしたいと思いつつも、業務の権限を作業補助に限る現行制度との兼ね合いで、発言する機会がなかなかないことにある種のもどかしさを感じると回答した者もいる。今後の制度の展開を考える上で一つのテーマを提供していると言えよう。

⑧業務内容・禁止事項・注意事項等の明

確化とその周知徹底

業務の範囲や禁止事項を明確化し、周知徹底する必要性が教員から指摘されていたが、SA側にも同様の指摘がある（平成22年度9.4%）。SAの場合は特に、現場で教員から「このような業務をして欲しい」と言われた際に、自身の権限で可能かどうか迷う場合がたびたびあることが、その背景にある。内規を策定して業務内容と禁止事項を明記し、説明会や報告会で周知・共有を行うようになってから事態は改善されているが、グレーゾーンは依然残る。平成28年度アンケートでも同様の指摘が見られ、報告会の充実等が課題として挙げられている。

⑨勤務態度の改善

勤務態度についての反省や、業務に対するSA自身の積極性・主体性の大切さを指摘する声も寄せられている。トライアル期には「業務に慣れてくると私語が多くなってしまった」「欠勤の際の連絡で、理由を明示しないで代行を依頼する人が時折いる」「教職員からの指示を待つのではなく、SAから指示を求めるべき」「毎回同じお手伝いの方法ではなく、どうやったら円滑に気持ちよく講義のスタートが切れるだろうかということを考え、行動に移してみることが大切」等の意見が見られた。

平成28年度アンケートでも、「教職員との報・連・相を心掛ける」「補佐役であることを常に念頭に置いて業務にあたる」「忘れっぽい場合指示の内容をすぐにメモする」「業務の引き継ぎをしなければならないときは、業務ノートに曖昧な書き方をせず、なるべく具体的に記述し、必要に応じてメモや付箋を使用する」「同じシフト

のSAに積極的に意見を出して、効率よく業務が行えるようにする」など、具体的な作業を行う中で、SA個人が自ら考えて、質の高い補助を提供するよう工夫し続けている姿を窺うことができる。

これらの認識が、教職員からの指導や、課題に対する回答として述べられたものではなく、自身の日頃の「気づき」や「工夫」を自由に筆記するように求めた自由記述のレポート・アンケートの中で記述されている事実は、学生自身が内省しつつ、業務の中で自己改善を進めて行こうとする主体的意欲を示すものとして重要であろう。

結び —— 「学びの場」としての充実を図るために——

第2節で制度構築の過程と、運営側（機構）からみた課題を、第3・4節で活用側（教員）と提供側（SA）から見たSA制度の利点・意義と課題を概観した。最後に、それらの中から見出すことのできる、本学におけるSA制度の意義について、（1）授業負担の軽減と授業改善への寄与、（2）学生の社会性の向上、（3）学生の帰属意識・連帯感の向上、という三点に集約してまとめた上で、それぞれ今後の課題・展望を述べて結びとしたい。

（1）授業負担の軽減と、それによる授業改善への寄与

先に述べた通り、学生スタッフによる取り組みの方向性は、主として「ピア・サポート」「教員補助」「学生FD」の三つが考えられるが、本学のSA制度にあっては、トライアル期に「学生FD」「ピア・サポート」

の可能性を探りつつも、大規模授業担当教員の負担軽減を目的とする「教員補助」に収斂・特化する方向を選択した。

活用側（教員）に対する調査の結果を見れば、SA制度は、こうした「教員補助」の点については、当初運営側が意図した水準に十分見合った成果を上げていると言える。また、負担軽減に伴い、授業準備や教室運営などに注力する時間的・労力的余裕が確保され、それによって教材の充実を図り、新たな工夫を取り入れるなど、授業の質向上にも一定の役割を果たしていることも確かめられていることから、ミクロレベルでのFDを下支えする制度としての意義も併せて認められよう。

また、提供側（SA）のレポート等においても、業務を単に教員の荷物運びといった次元で捉えるのではなく、教職員と学生が協力して大学の教育活動を改善して行く取り組みであるとの意識が見られる。結果として、運営側・活用側・提供側の三者において、制度の意義に対する認識がしっかりと共有されているという意味で、SA制度は順調に成果を上げていると評価できよう。

一方、今後の課題としては、運営側としては人員確保、また第4節でSAから指摘された諸々の反省点・問題点が挙げられる。これらは集約すれば、補助の質をいかに向上するかという問題であり、我々運営側と、SAとが協働しつつ、具体的改善策を互いに出し合って解決して行くべきことであろう。

（2）学生の主体性・積極性・社会性の向上

2.4で述べた通り、SA制度は平成26年度以降「学内ワークスタディ」の一環として位置づけられ、当初の教育活動支援に加

えて、学生の社会性向上に資する役割をも担うものとして位置づけ直された。「社会性向上に資する」の意味については様々な理解があり得るが、ここでは、責任感・主体性・積極性の育成といった学生の内的成長を促進すること、社会で生きて行くための自主的思考・判断能力を培うこと、他者とのコミュニケーション能力を育むことを、大きく包括して指すものと理解しておきたい。

第1節で述べたように、本学のSA制度のような作業補助的業務は、時に「雑用」と呼ばれる種類のものとして考えられることが多く、それは「廣中レポート」が提起するような「学生が自立した人間として成長するための訓練として、学生に一定の責任を持たせる」といった発想とは距離があると捉えられがちである。殊に、「ピア・サポート」「学生FD」のような取り組みこそ、学生スタッフが本来目指すべき在りようであると見なす立場に身を置いてしまうと、作業補助的な業務形態は（いみじくも「雑用」という語が示すように）学生の社会性向上を育む上で不十分であると受け止められてしまうかも知れない。

しかし、教員・SAから寄せられたアンケート・レポートを検討する限り、そうした見方は必ずしも妥当とは言えない。教員側のSAに対する評価や、問題点の指摘から見えて来たように、質の良い作業補助は、当該業務に従事するSA自身の責任感や、主体性・積極性といった内的成長に支えられて初めて提供し得る。教員の指示・要望を理解して柔軟に対応する能力、不測の事態に迅速かつ適切に対応する能力、担当業務をより効率的に遂行する方法を自ら案

出する能力は、学生の社会性向上という面から見ても、大いにプラスとなることは言を俟たない。教職員や多様な学生との交流に加えて、業務を通じて情報の伝達・共有を正確かつ効率的に行ってゆくことも、社会で生きて行く上で必要とされるコミュニケーション能力を培う素地を提供する。更に、SAの中には、教員の授業準備に協力することを通して、大学の授業に対する見方や自分自身の学ぶ姿勢に変化があったと回答した者もいたように、大学の授業に複数の立場から関与するという経験自体が、学生の視野を広げることに繋がっていることも注目されよう。

(3) 大学に対する帰属意識の高まり

SAのリポートやアンケートでは、自大学への帰属意識について、直接明確に語る記述は決して多くはない。しかし第4節で検討した通り、大学を単に授業を受けに来る場所としてのみ捉える考え方や、SAについて単なるアルバイトと捉える意識からは明らかな変化が見られ、「大学の教育活動に参加・貢献する」ことの意義を認め、自らがその一員として活動することで成長できたとの認識を有する学生は多い。

これらの体験を共有することは、SA同士の仲間意識や、共に活動する教職員との連帯感にも繋がり、「國學院大學という共同体の一員として、その活動に参加する自分」という帰属意識を形成する面がある。その意識は卒業後も持続する例が少なくなく、SAに従事した経験を持つOB・OGの中には、卒業後も折りに触れて来校し、後輩のSAや教職員と交流する者がいる。また、大学が年1回開催するホームカミング

デーにおいて、SAが自主的に開催する同窓会に参加する者も多い。

SAの活動の中で、このような帰属意識・連帯感を育んで行くことは、言うまでもなく業務に対する意欲的・能動的な姿勢を引き出すこととなろう。また、SAという立場を離れて後も、共同体の一員としてその活動に参加・貢献する経験を持ったということ自体が、遠からず社会に出て働く個々の学生にとって大きな意義をもつはずである。運営側としては、こうした帰属意識・連帯感の伸長を、制度のもたらした良き結果として単に喜ぶだけであってはならない。むしろ、それらの意識を積極的に育み、活かして行くことがSA制度の持つ「学びの場」としての可能性を一層広げるものと捉え直した上で、そのための具体的施策を考えていくべきであろう。

以上述べて来たように、学生スタッフによる「教員補助」の取り組みとしての本学SA制度は、教員からも高い評価を得、運営方針や作業の効率化等に課題を有しつつも、教職員と意欲ある学生たちとの協働の中で今後も継続・発展して行くことが期待される。特に、当面は解消することが困難な大規模講義系授業において、なお授業改善・教育力向上を図って行かねばならない今日の本学の状況において、そうしたミクロレベルでのFDの取り組みを下支えする効果を発揮する制度として、SA制度の意義は大きい。

他方で、単なる「教員のお手伝い」にとどまらない、学生自身の社会性向上に資する「学びの場」を提供する取り組みとしても、SA制度は十分なポテンシャルを有し

ていると考えられる。一般に「雑用」と呼ばれるような業務も、従事する学生が意欲的・能動的にその質向上を追求して行く限り、豊かな学びを提供する場として成り立ち得るのであって、他の様々な取り組みと同様、学生に大きな成長をもたらし得るはずである。本学のSA制度が「学内ワークスタディ」として目指すべき方向性は、そこにあると言えよう。

引用・参考文献

- 遠海友紀ほか(2009)「大学の授業支援に参加するスチューデントアシスタントの研修デザイン」,第15回大学教育研究フォーラム発表論文集,74-75
- 伊藤 琴音, 吉永 一行(2013)「法学部「プレップセミナー」におけるスチューデント・アシスタント(SA)の試み」,『高等教育フォーラム』3, 39-43
- 岩崎千晶ほか(2009)「大規模私立大学におけるスチューデント制度の評価」,第15回大学教育研究フォーラム発表論文集,62-63
- 岩崎千晶ほか(2015)「関西大学における教育補助者を活用した活動、授業実践の動向分析—学部生・院生の教育力活用制度の全学展開に向けて」,(『関西大学高等教育研究』6, 53-67
- 北野秋男(2006)『日本のティーチング・アシスタント制度—大学教育の改善と人的資源の活用—』,東信堂
- 毛利康俊(2006)「Student Assistant制度の創設について」,『西南学院大学法学論集』38-34,161-167
- 野波 侑里ほか(2003)「大手前学園伊丹キャンパスにおける情報教育関係スチューデント・アシスタントの実態調査報告」,『大手前大学社会学部論集』4, 163-185
- 大江淳子(2013)「留学生の日本語学習をサポートするSAに関する実践報告」,『言語文化社会』11,131-145
- 竹中喜一(2015)「学生による教育・学修支援制度の設計・運用における課題—関西大学の事例を中心に」,『大学教育研究』23, 55-74
- 立山博邦(2013)「大学におけるスチューデント・

- アシスタント(SA)制度の考察—日米比較の視点から」,『社会システム研究』26, 137-150
- 「SA(スチューデント・アシスタント)登板」(2009),『Between』2009冬号
- 「小特集 スチューデント・アシスタントのさらなる活用」(2012),『大学時報』356
- 『高等教育に関する質保証関係用語集』第4版(大学改革支援・学位授与機構, 2016)
- 文部科学省「大学における学生生活の充実方策について(報告)—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」(2000)
- 日本学生支援機構「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査」2008
- (http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afiedfile/2015/10/09/sa.pdf 2016年10月31日確認)
- 文部科学省中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」(2009)
- 文部科学省中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(2012)

注

- (1) 無論、それ以前よりSA制度を指向・導入した大学も存在する(野波 侑里ほか2003, 毛利康俊2006)
- (2) 本学においては、すでに平成17年には受験生向けの入試広報活動のサポートを行う「学生アドバイザー」、19年には各期における履修登録時期に上級学生が新入生の履修登録の相談に乗りアドバイスを行う「エルダーサポーター」等の学生によるサポートチームを設置している。
- (3) 註2参照。
- (4) 國學院大學教育開発推進機構編・刊『教育開発ニュース』Vol. 2、「平成21年度SA(スチューデント・アシスタント)第1期担当者ヒアリング会」(<http://www.kokugakuin.ac.jp/content/000040165.pdf>)参照。
- (5) この第2期においては、「大人数授業への補助」以外に、実技・実習系(パソコンのスキルを修得する授業)に対して、習熟の遅い学生に対して上級生が個別に指導を

行うことで、教員が授業運営自体に注力することを目的にSAを配置した。このため、本授業に限り、資料の印刷や配布・回収等の通常業務に加え、「机間巡視と未習熟学生への技術面に関するサポート」という業務を追加することとし、その性質上、過去に当該授業を履修し、十分な成績を修めた学生をSAとして配置することとした。しかし、この「実技・実習系」におけるSAの役割は、どちらかというところ「ピア・サポート」という面が色濃く、本学が指向した本来的なSA制度の理念である大人数授業を担当する「教員補助」というあり方とは合致しないものであることから、第2期トライアルをもって実技・実習系へのSA配置は除外した。なお、その後、この第2期の経験を活かし、平成25年度よりパソコンのスキルを修得する授業への補助に特化した「CA（コンピュータ・アシスタント）」制度を導入した。

(6) 『教育開発ニュース』の記事は本機構 Web

サイト (<http://www.kokugakuin.ac.jp/iatl/edu0200102.html>) より閲覧が可能。

(7) 註2参照。

(8) 評価に関わる業務としては、他に試験の採点補助、成績表への転記を行って欲しいとの要望もあったが、機構で検討の結果、成績評価の作業に学生が直接参加することは望ましくないとして対応を見送った。

(9) 平成28年度のアンケートでは、SAの習熟度や勤務態度に関する問題点の指摘や、教員とのコミュニケーション不足に関する指摘はほとんど無く、トライアル期に較べてSAの勤務体制が成熟しつつあることが窺われた。他方、制度自体の改定に関する要望は少なからずなされており、①対象授業の拡大（300名以上から200名以上への引き下げ）、②業務範囲の拡大（出席カードの転記や成績記録の補助等）、③配置人数や配置時間帯をより弾力的にすべき、等の内容であった。

【資料】

1 トライアル運用期に実施した教員向けアンケートの設問項目

◆第1期 SA トライアル参加教員へのアンケート

- 設問1 SAが授業に配置されたことにより、授業準備等における負担は軽減されましたか。
(軽減された/軽減されなかった)
- 設問2 負担が軽減されたとお答えの方に質問します。具体的にどのような負担が軽減されましたか。また、負担が軽減されたことにより授業に対して工夫や改善ができたことがあればお書きください。(記述式)
- 設問3 今回のトライアルでは、教材印刷資料の受け渡しは学修支援センター相談室を介して行いましたが、これについてご意見等ありましたらお書きください。(記述式)
- 設問4 今回のトライアルでは、授業時間中はSAを教室内に待機させましたが、教材配布やコメントペーパー回収、AV機器設置等の時間以外にも、SAが授業時間を通じて教室にいる必要はありましたか。理由も含めてお書きください。(必要あり/なし/どちらとも言えない)
- 設問5 先生の授業に配置したSAの人数は適切でしたか。適切でなかった場合、適切と考えられる人数と、その理由をお書きください。(適切であった/適切ではなかった/どちらとも言えない)
- 設問7 今回、トライアルを通じてSA制度は必要と感じましたか。理由も含めてお答えください。
(必要と感じた/必要と感じなかった)
- 設問8 今後、SAにどのような授業支援を期待しますか。自由にお書きください。(記述式)

◆第2期 SA トライアル参加教員へのアンケート

【実技系】

- 設問1 SAの補助がある場合と無い場合とでは、授業運営にどのような違いが出ましたか?
- 設問2 SAが授業補助をすることにより、どのような授業運営が可能でしたか?
- 設問3 今回の業務内容は以下の6つでしたが、(a)特に役立った業務、また、(b)さほど必要性を感じなかった業務を、理由も含めてお書きください。(複数回答可・ただし(7)はPC実習系授業のみ)

【業務内容】

- (1) 教材・資料の準備補助 (印刷・運搬など) (2) 授業時の教材・資料の配布
- (3) 出席カードの配布・回収・整理 (4) 通常授業時のコメントペーパー等の配布・回収
- (5) AV機器等の運搬・設定準備や操作 (6) 授業アンケートの配布・回収・整理
- (7) 机間巡視と未習熟学生への技術面に関するサポート

- 設問4 今回行った業務内容以外に、必要だと思われる補助業務がありましたらお書きください。
- 設問5 後期実施に向けて、制度上見直しをすべき点がありましたら、忌憚の無いご意見をお寄せください。

【大教室系】

- 設問1 SAの補助がある場合と無い場合とでは、授業運営にどのような違いが出ましたか?
- 設問2 SAが授業補助をすることにより、どのような授業運営が可能でしたか?
- 設問3 今回の業務内容は以下の6つでしたが、(a)特に役立った業務、また、(b)さほど必要性を感じなかった業務を、理由も含めてお書きください。(複数回答可・ただし(7)はPC実習系授業のみ)

【業務内容】

- (1) 教材・資料の準備補助 (印刷・運搬など) (2) 授業時の教材・資料の配布
- (3) 出席カードの配布・回収・整理 (4) 通常授業時のコメントペーパー等の配布・回収

- (5) AV 機器等の運搬・設定準備や操作 (6) 授業アンケートの配布・回収・整理
 (7) 机間巡視と未習熟学生への技術面に関するサポート

- 設問4 今回行った業務内容以外に、必要だと思われる補助業務がありましたらお書きください。
- 設問5 後期実施に向けて、制度上見直しをすべき点がありましたら、忌憚の無いご意見をお寄せください。
- 設問6 第Ⅰ期トライアルにもご参加いただいた先生方へ質問します。第Ⅰ期と第Ⅱ期ではどちらがより充実した授業補助を受けられましたか？ 理由も含めてお答えください。

◆第3期 SA トライアル参加教員へのアンケート

- 設問1 SAが授業補助をすることにより、どのような授業運営が可能でしたか？
- 設問2 SA 自体の働き（業務に対する態度や作業の質等）について、ご意見をお寄せください。
- 設問3 今回行った業務内容以外に、必要だと思われる補助業務がありましたらお書きください。
- 設問4 平成23年度実施に向けて制度上見直しをすべき点がありましたら、忌憚の無いご意見をお寄せください。

2 平成22年度後期（トライアル3期）SA レポートより（回答者数32名・複数回答可）

[A] 成果・長所

| No. | 項目 | 件数 | 件数/ 回答者数 |
|-----|--|-----|-------------|
| 1 | ・ 普段あまり接点のない他の学部・学科・学年の学生や教職員との交流が得られた | 15件 | 46.9% |
| 2 | ・ 大学の教育活動や、教育改善の活動に参加する貴重な経験を通して、授業を教職員とともに作り上げているという充実感が得られた | 6件 | 19.4% |
| 3 | ・ 教職員からの授業や学生に対する見方や、教員の準備の大変さを知ること、大学や教育に対する視野が広がった・授業に臨む態度が変化した | 5件 | 15.6% |
| 4 | ・ 授業の補助作業を通じて自分が役に立っているという充実感があつた | 4件 | 12.5% |
| 5 | ・ 事務作業に関するスキルの習得・向上 | 2件 | 6.3% |
| 6 | ・ 自分の役割を果たすことについての責任感が高まった ・ 他のSAと相談しつつ教員に提案を行い、授業運営に良い影響を与えられた ・ 大学での空き時間を有意義に（教育活動に貢献して）過ごすことができた ・ 友人からSAの活動に対する感謝の声を聴くことができた ・ 教職課程のインターンの際に経験を活かせると感じた ・ 学内での「居場所」ができた | 各1件 | 各3.1% |

[B] 改善点・課題

| No. | 項目 | 件数 | 件数/ 回答者数 |
|-----|---|-----|-------------|
| 1 | ・ 業務で得られたスキルやノウハウ、課題とそれに対する対応方針の蓄積・共有・継承 (例) 備品の不足や機器トラブルなど不測の事態が生じた際の対応、AV機器の使用方法や資料配付等のスキルの共有、報告会の開催による情報交換、作業マニュアルや業務ノートの作成と改善、掲示板の設置など | 14件 | 43.8% |
| 2 | ・ 支援対象授業の担当教員とSAとの間のコミュニケーション・連携の緊密化 | 7件 | 21.9% |

| | | | |
|----|---|-----|-------|
| | (例) 作業内容の事前指示、教員との事前打ち合わせ、休講時の連絡、SAの顔が見えるよう、業務の際に教員に自己紹介する、等 | | |
| 3 | ・ シフトの配置や時間を、作業の量や内容に即して調整する必要がある (例) 業務時間によって仕事量のムラがある、人数が少なすぎる/多すぎるシフトが存在する、手が空いたら教室の清掃など別の作業はできないか、等 | 7件 | 21.9% |
| 4 | ・ SAの活動を、教員や学生によりアピールし、理解してもらう必要がある (例) 学生や教員に対するSA活動の広報。また、PRや、スタッフとしての存在をアピールするため、専用のブレザーや帽子の導入を提案する者2名 | 5件 | 15.6% |
| 5 | ・ 教室環境、学生の授業態度、授業運営上の問題点などに気づくことがあった | 4件 | 12.5% |
| 6 | ・ 授業を受講している学生に対する接し方の検討と、その方針の共有 (例) 出席カードを何枚も取りに来る学生への対応、所属等について記入ミスがある学生に対する助言は可能か、等 | 3件 | 9.4% |
| 7 | ・ 仕事場が学修支援スペースに隣接しているため、学修支援に携わっている教職員や、相談者の学生の邪魔にならないよう、間に仕切りやカーテンが必要 | 3件 | 9.4% |
| 8 | ・ SA間の業務に関する相互連絡の緊密化 (例) 欠勤による代行依頼の徹底、業務開始前の事前打ち合わせ時間の確保等 | 3件 | 9.4% |
| 9 | ・ 規約・マニュアル等の作成による、業務内容・禁止事項の明確化や、勤務の際の注意事項、責任範囲の明確化を行い、周知徹底することが必要 | 3件 | 9.4% |
| 10 | ・ SA同士の交流・懇親の機会を増やすべき(シフトが異なるなどの理由で、顔を合わせる機会がないSAもいるため)。 | 2件 | 6.3% |
| 11 | ・ 教職員からSAに指示するのではなく、SAから教職員に指示を求める積極性 ・ 制度が長期にわたるとノウハウの継承が必要になるが、メンバー間でシフトごとにリーダーを設けるなど、責任・立場に強弱を設ける必要が出てくる可能性もある。それが適切かどうかも含めて検討すべき ・ 出席カード等の様式の共通化(独自仕様の場合、ソートが難しい) ・ 教材運搬のための台車など、備品の充実が必要 ・ 教材印刷作業で、印刷機などを一時的にSAが占有してしまうことがある。他の教員に結果として迷惑をかけては申し訳ないので配慮が必要。教員側からも、必要なとき・急いでいるときは気軽にSAに声がけをしてもらいたい ・ 欠勤が多いと迷惑がかかるため、体調管理に注意すべき ・ 業務に慣れると、業務中の私語が少し多すぎると感じるがあった ・ 業務をいかにスムーズに進めるか、自主的に考え、行動に移す姿勢が必要 ・ 業務の中で個人情報などを目にしてしまう場合があり、注意が必要と感じた ・ 出席カードの取扱は、紛失すると当該学生の評価に関わるので注意すべき ・ 「大学の核となる学生集団」として、他の学生組織や教職員との連携を強めてゆくことで、大学にとってなくてはならない組織として成長してほしい | 各1件 | 各3.1% |

3 平成23年度前期（本格稼働第1期）SA レポートより（回答者数24名・複数回答可）

[A] 成果・長所

| No. | 項目 | 件数 | 件数/ 回答者数 |
|-----|---|-----|-------------|
| 1 | ・ 普段あまり接点のない他の学部・学科・学年の学生や教職員との交流が得られた | 8件 | 33.3% |
| 2 | ・ 事務作業に関するスキルの習得・向上（就職活動の自信になった、等） | 2件 | 8.3% |
| 3 | ・ 教職員からの授業や学生に対する見方や、教員の準備の大変さを知ること、大学や教育に対する視野が広がった・授業に臨む態度が変化した | 2件 | 8.3% |
| 4 | ・ 業務の中で、様々な授業を垣間見られるのが楽しかった ・ 一般学生のSAに対する認知が高まったと感じる。作業時に協力が得られた | 各1件 | 各4.2% |

[B] 改善点・課題

| No. | 項目 | 件数 | 件数/ 回答者数 |
|-----|--|-----|-------------|
| 1 | ・ 業務の中で蓄積されたスキルやノウハウ、課題等の蓄積・共有・継承 （例）AV機器の使用法、報告会の回数を増やす、作業マニュアル・業務ノート・掲示板の作成・改善等 | 14件 | 58.3% |
| 2 | ・ SA間の業務に関する相互連絡の緊密化が必要 （例）欠勤による代行の連絡、連絡用黒板の書き方の改善、SA間の情報の引き継ぎをスムーズにする方策の検討等 | 5件 | 20.8% |
| 3 | ・ 支援対象授業の担当教員とSAとの間のコミュニケーション・連携の緊密化 （例）作業の指示や事前打ち合わせ・休講の際の連絡等 | 5件 | 20.8% |
| 4 | ・ 業務直前の欠席連絡や、「私用」「私事」など不明瞭な欠席理由がみられる。業務に対する意識を高め、マナーや言葉遣い等にも注意する必要がある | 4件 | 16.7% |
| 5 | ・ シフト配置や業務時間を、作業の量や内容に即して調整する必要がある （例）シフト内でも業務のローテーションを組んではどうか、就職活動や教職課程を取っているSAは欠席がちとなる時期があるのでフォローが必要、等 | 4件 | 16.7% |
| 6 | ・ 教室環境、学生の授業態度、授業運営上の問題点などに気づくことがあった（対策や改善方法の提案にSAが関与できないことへのもどかしさ・悩みがある） | 2件 | 8.3% |
| 7 | ・ 教員との接し方について、ある程度指針のようなものがあつたほうがよい （例）お礼にお茶をごちそうして下さる先生もいるが、受けても良いか等 ・ SA同士の交流・懇親の機会を増やしてほしい ・ 作業スペースをもう少し広くしてほしい ・ 業務の効率について、学生から意見をもらったことがあつた ・ 配布教材の日程等で確認ミスがあつたので、今後改めたい ・ 新規学生の継続的な確保 ・ SAの活動を教員や学生にアピールするため、ブレザー等制服を導入したい ・ 教材運搬のための台車など、備品を充実したい | 各1件 | 各4.2% |

4 平成28年度後期はじめに行った教員向けアンケートの設問項目

| | |
|------|---|
| [1] | SA が授業に配置されたことにより、授業準備・授業運営等における作業負担は軽減されたと感じますか。どちらかをご選択ください。(軽減された/軽減されなかった) |
| [2] | 1で「軽減された」と回答された方に質問します。①具体的にどのような負担が軽減されましたか。②負担が軽減されたことにより、当該授業で工夫・改善できたことがあればお書きください。 |
| [3] | 1で「軽減されなかった」と回答された方に質問します。軽減されなかった理由として、考えられることがあればお書きください。 |
| [4] | 人員配置の手配や、教材・印刷資料等のやりとりは、教育開発推進機構事務課を介して行っていますが、その中で改善が必要と感じられたことがあればお書きください。 |
| [5] | 先生の授業に配置したSAの人数は適切でしたか。いずれかをご選択ください。(適切であった/適切ではなかった/どちらとも言えない) |
| [6] | 5で「適切でなかった」と回答された方に質問します。その理由について、お書きください。 |
| [7] | SAの内規に定められた業務内容の中で、①特に役立つ業務、②さほど必要性を感じなかった業務を、その理由を含めてお答えください。(複数回答可) (参考;業務内容) (1) 教材・資料の準備(印刷・運搬のみ)及び配布、(2) 出席カード、コメントペーパー等の配布・回収・整理、(3) 授業評価アンケートの配布・回収、(4) AV機器等の運搬・設定準備及び操作、(5) 小テスト・レポートの配布・回収 |
| [8] | SAとして配置された学生の勤務の様子(業務に対する態度や作業の質等)をご覧になって、①長所と感じられた点、②改善が必要と感じられた点があれば、自由にお書きください。 |
| [9] | 現在のようなSA制度は今後も必要だと感じますか。その理由も含めてお答えください。(必要と感じる/必要とは感じない) |
| [10] | 現行のSA制度で行っております業務内容以外に、必要だと思われる補助業務があればお書きください。 |
| [11] | 現行のSA制度全般について、お気づきの点や等ございましたら、ご意見をお寄せください。 |

5 平成28年度後期はじめに行ったSA向けアンケートの設問項目・回答一覧(回答者数11名)

[備考] 寄せられた回答中、設問ごとに代表的なものを引用し、類似内容の回答を含めた合計件数を並記した(一人の学生が複数の事項を挙げた場合は、それぞれ1件とカウントした)。明らかな誤字・脱字や、文意が通らない箇所などは検討の上、原文の主旨を損なわない限りにおいて修正を加えた。SA業務と無関係な記述や、私的な内容を含んだ箇所は除外した。

[1] SAに志望した理由について

○ あなたがSAを志望した理由について、簡単に書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|-----------------|--|-----|
| 大学の教育活動に貢献したい | <ul style="list-style-type: none"> ● 学内ワークスタディの一環ということで、学生として大学教授や講師の方の補佐が出来るという点に興味を持って志願しました。 ● 一年生の時に受けた授業で、SAが迅速に業務を行っている姿を見してきました。SAの業務が、授業を早く始められることに繋がっていることを感じ、私もSAになって同じように貢献したいと思い、志望しました。 | 4件 |
| 他の学生スタッフにすすめられて | <ul style="list-style-type: none"> ● 同じ学内ワークスタディのエルダーサポーターをやっていて、エルダーサポーターの先輩方から勧められたからです。学内では特にサークル等には所属していません。 | 3件 |

| | | |
|------------------|---|-----|
| | <p>たので、違う学科の人たちと仕事をするという SA の仕事内容に魅力を感じました。人の役に立つのが好きで、エルダーもやっていたので、SA でも先生方や学生など誰かの役に立てたら良いなとも感じていました。</p> | |
| 将来の進路(教育関係)を意識して | <ul style="list-style-type: none"> ● 将来、教職に就きたいと考えており、受講生とは違う目線で授業運営に関わることで、多面的に授業作りを学ぶことができるのではないかと考えたためです。 | 2 件 |
| 自己の成長につながると考えたため | <ul style="list-style-type: none"> ● 先生方の授業補助をするという経験が、自己の成長につながると考えたため。 | 2 件 |

○ SA になったことで「よかった」「役立った」「成長できた」と感じたことがあれば書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|--------------------------|---|-----|
| 他学部・学科の学生や、教職員との交流 | <ul style="list-style-type: none"> ● 今まで所属する学科内でしか大学のことを考えていなかったのですが、SA になったことで、他学科の学生や、教職員の方々と交流することが増えて、同時に大学の様々な側面を知ることができました。 ● 普段は、同じ学部の似たような価値観や雰囲気の友人といるため、付き合いやすさはあるものの、考えに偏りが生じやすく、様々な面で多様な方面からの意見交換がしづらい環境だった。SA では勉学に対する興味関心も向き合い方も異なる人同士が集まるため、思いもよらない意見を聞くことができ、新鮮だと感じるが多い。特に就職活動やゼミに関する情報交換を、学科を問わず行えるのが嬉しい。 | 4 件 |
| 主体性・社会性の向上や視野の拡大など、精神的成長 | <ul style="list-style-type: none"> ● SA になったことで「物事に対する責任感」について成長できたと感じています。一見単純な仕事のように思えたとしても、それを疎かにしてしまえば、後々多くの方々に迷惑をかける可能性があるのだと認識できたことが、その要因になっているのだと思います。 ● 普段関わることのない他学年・他学科の人たちとの交流や、学生スタッフという立場を意識しつつ業務を行うことで、自分自身成長できたと思う部分がありました。また、先輩方や教職員の方々とも関わることで、言葉遣いを意識するようになりました。これから社会に出る上でも大切なことなので、良かったです。 ● 報告・連絡・相談などの社会人として基礎的なことを、実践を通して身につけることができました。仕事に従事する際にも、また今後の就職活動にもよい影響があったと思います。 | 4 件 |
| 自分自身が授業を受ける態度が変わった | <ul style="list-style-type: none"> ● 先生方の授業時の光景を目にしたこと、また授業をされる前後の事についても少し知ることができたことから、学生としてもっと真面目にならなければならぬと感じさせられるきっかけになった。 | 2 件 |
| 事務作業スキルの習得・向上 | <ul style="list-style-type: none"> ● AV 機器設置などの方法を学べたこと。 | 2 件 |

[2] SA 業務について

○ 業務上工夫していること、心がけていることがあれば書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|----------------------------|---|-----|
| 迅速に手際よく仕事を進めるため、工夫・改善を行う | <ul style="list-style-type: none"> ● 忘れっぽいため、指示の内容をすぐにメモをとっている。また、他の人と比べて耳から入ってくる情報が記憶に残りづらいため、口頭のみ指示の場合には、不安があればすぐに確認をとるよう心掛けている。 ● 業務を行う上で気になったことに関しては、積極的に同じシフトの人に意見を出して、効率よく業務が行えるように心掛けています。 | 4件 |
| 担当教員とのコミュニケーション・連携を意識する | <ul style="list-style-type: none"> ● 職員の方々との「ほうれんそう」（報告・連絡・相談）。ただし、業務の時に、直接先生方とやりとりするのは我々学生なので、伝達事項に行き違いのないように気をつけています。先生方との業務の確認についても同様に、漏れないよう、きちんと確認するようにしています。 | 3件 |
| SA 同士のコミュニケーション・連携・協働を意識する | <ul style="list-style-type: none"> ● 自身一人で全ての業務をこなすのではなく、全体がレベルアップできるように仕事を割り振ること。 ● 業務の引き継ぎをしなければならない時は、業務ノートに曖昧な書き方をせず、なるべく具体的に記録するように心掛けています。また、業務ノートだけでは他のシフトの方が分かり難いと判断した場合は、些細な内容だとしても、適宜メモや付箋を残しておくように工夫しています。 | 2件 |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ● 授業はあくまで先生が行うものなので、補佐役であるということを常に念頭に置いて業務にあたっています。 ● 自分が、学生の前に立って作業しているのだということを意識すること。 ● 業務の規定上可能な範囲で、最大限の力を尽くすようにすること。 ● 担当教員や学生など、他者の気持ちを考えて行動するように心掛けている。 | 4件 |

○ 業務上、苦勞していること、難しいと感じていることがあれば書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|------------------------------|---|-----|
| 担当教員との連携・コミュニケーション・多様な要望への対応 | <ul style="list-style-type: none"> ● 業務の範囲として、どこまで SA が関わって良いのか判断に迷い、困ることが稀にあります。私を含めて、SA は全員、先生方の期待をより上回るような仕事をしたいと願っていると思います。(少なくとも私はそう思っています)。しかし、先生方からの期待値が上がると、こちらとしても、その要望にどこまで応えればいいのか悩むこともあります。 ● 先生方の期待値が大きいため、業務の規定上できないことなどを時折お願いされる場合があること。また、先生からのご要望で行っている業務に対して、受講している学生の理解が得られないこともあり、難しいと感じます。 | 4件 |
| 具体的な業務上の課題・臨機応変な対応 | <ul style="list-style-type: none"> ● 授業内での資料配布のタイミングがむづかしいと感じます。早めに配り始めると遅く来た学生への対応が行き届かず、遅く配り始めると授業の開始時間を過ぎてしまう可能性があります。そのため、資料配布をする時ほどのような工夫をすれば良いのか悩んでしまいます。 ● 時折、臨時に代行でシフトに入ると、いつもと違う仕事をするため、AV 機器の取り扱いやプリント配布のしかたで戸惑うことがあります。 | 4件 |

| | | |
|-------------------|---|----|
| 経験やスキルの不足による不安・失敗 | <ul style="list-style-type: none"> ● パソコンの設定など、前期のシフトではあまり必要とされなかったため十分経験していなかった業務が、後期になって別の授業で必要となった時にうまく対応できず、申し訳ないと感じたことがあった。 | 2件 |
| SA 同士の連携と協働 | <ul style="list-style-type: none"> ● 後期になると、毎年仕事が少ないため、いかに SA 全体に仕事が行き渡るかを考えること | 1件 |

[3] 教員との関係について

- 授業の担当教員とはうまく連携が取れていると感じますか。連携がうまくゆかない、あるいはコミュニケーションが難しいと感じる時があれば、どのような場合にそう感じたか書いてください。また、できれば、その時にあなたがどのように対応・対処したかについても書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|---|---|-----|
| 事前打ち合わせ・業務内容確認の必要を感じられたとき | <ul style="list-style-type: none"> ● ゲスト講師にお話していただく授業の補助を行った際、その講師の方が視覚障害者の方であったことを知らずに機材の説明をしてしまったことがあります。その時以来、ゲスト講師の方をお招きする場合は、授業の前に、その講師の方がどんな方なのか、必ず事前にかかっておくようにしています。 ● 授業によっては、コメントペーパーの配布や、出席カードの回収を行うタイミングが毎回違う場合があります。そのため、毎回、どのような対応を希望されるか同様ののですが、少し面倒な様子をされることがあります。しかし、業務で失敗するほうが先生にご迷惑をおかけするので、必ず確認は欠かさないようにしています。 | 4件 |
| SA が現行規程上できない業務を要望されたとき(教員との間で業務に対する認識の齟齬があるとき) | <ul style="list-style-type: none"> ● 先生から、SA の規約上できないことをお願いされた場合等に難しいと感じる。その場合は規約上出来ないことを伝え、先生に理由を説明するが、ご理解が得られない場合は職員の方から改めて説明してもらうようにしている。 ● 時々、SA の業務可能な範囲を超えた内容の仕事をお願いされる先生がいらっしゃるので、その際は早めに機構の職員の方に伝えるようにしています。 | 2件 |

- 授業の担当教員から、SA による補助について感想や意見をもらったことはありますか。あればいくつもの良いので書いてください。また、担当教員でなくても、教職員から感想や意見を言われたことがあれば、それについても書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|------------------|---|-----|
| 作業補助に対する評価・感謝 | <ul style="list-style-type: none"> ● 大教室での資料配布は一人では対応しきれないので、SA の制度があつてよかったという感想はうかがったことがある。 ● 担当教員の方から「助かります。ありがとうございます。来週もよろしくお願ひします」といった感謝のお言葉をいただいたことがあります。また、コメントペーパーを印刷する際に、教職員の方から「ありがとうございます」とお言葉をいただいたことがあります。 ● 長時間勤務している授業の担当の先生に名前を覚えていただき、「君なら任せられる」というお言葉を賜りました。 | 6件 |
| 業務の進め方についての意見・指摘 | <ul style="list-style-type: none"> ● コメントペーパーの配布方法やソートの方法について、改善点を指摘していただいている。また、兼任講師の先生からは、他の大学と比較して國學院は SA のおかげ | 1件 |

| | | |
|------------------|--|-----|
| | で授業がやりやすいという感想をいただいたことがある。 | |
| 補助業務の内容に対する意見・要望 | <ul style="list-style-type: none"> ● ほとんどの先生が SA に好意的であり、補助のおかげで助かっていると仰います。一方で、要望として「出席簿を渡すからこの順番に並べてほしい」「出欠表に○をつけてほしい」などはよく言われます。 | 1 件 |

〔4〕 学生との関係について

○ 授業を受けている学生との間で、困ったこと、対応を検討する必要があると感じたこと、コミュニケーションが難しいと感じられたことがあれば書いてください。また、できれば、その時にあなたがどのように対応・対処したかについても書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|-----------------------|---|-----|
| 配付資料・コメントペーパー等の配布方針 | <ul style="list-style-type: none"> ● 出欠確認のためコメントペーパーを配る授業では、後になって学生がやってきて「コメントペーパーがほしい」と言われることがあり、そういう場合は「渡すか、渡さないか」の判断が難しいです。僕の場合、先生から強く「1人1枚」との指示があった場合、あるいは、配布した時点で（遅刻など）明らかに教室にいなかった学生には渡さない、それ以外の時には原則改めて配るという方針を取っています。 ● 先生から1人1枚との指示があるにも関わらず、コメントペーパーや出席カードを追加で要求されることや、遅れて提出したものを受理してほしいという希望を言われることが、たびたびあります。その場合には、私どもに裁量権がないことを伝え、先生に直接伺ってほしい旨を伝えました。 | 6 件 |
| 学生からの質問・問い合わせに対する対応方針 | <ul style="list-style-type: none"> ● 「SA」についてよく知らない学生が、授業の内容に関することを聞いてくるのが時々あります。その際は、基本的に担当教員の所へ行くよう促しています。 ● 以前、学生証を忘れてしまった学生から、「学生証を忘れてしまって、出欠記録用のカードリーダーに通せなかったため、その旨を担当教員に伝えておいてもらえないか」という依頼をされたことがあります。その時は、SA から先生へお伝えするのは不相当だと判断し、当該学生には所属と氏名を記載したメモを持って直接先生へ報告して欲しいと伝えました。 | 2 件 |
| SA 制度に対する一般学生の認知の低さ | <ul style="list-style-type: none"> ● 困っているというほどではないが、学生が SA のことを、補助のアルバイトではなく、職員の人と勘違いしているように思えるシーンが多々見受けられる。たとえば、その授業の評価方法について尋ねられたり、先生個人に対する連絡・取り次ぎを依頼されたりすることがある。これは学生が SA という制度を知らない、もしくはどんなことをやっているのか十分認知されていないからではないかと思う。実際、私の周りの友人に「SA に興味がないか」と誘いをかけた際には、SA という単語自体初耳で、何をしているのかわからないと言われたことがある。上記のことは SA という制度自体また認知度が低いから起こることだと思われる（ちなみに、上のような学生には、その都度説明すれば納得してくれるため、無茶なことを言われて困っているというわけではない）。 | 1 件 |
| 受講態度の悪い学生への対応方針 | <ul style="list-style-type: none"> ● SA は学生に対して、受講態度などについて直接注意することはできないが、あまりにも目に余る学生がいた場合、どう対応したらよいかかわからず、授業後に教員に報告するという対応で後手になってしまう。 | 1 件 |

[5] SA 中間報告会・最終報告会について

○ あなたにとって、報告会はどのような役に立っていますか。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|-----------------------------------|--|-----|
| 業務内容・業務手順・トラブル対応策等の共有ができる | <ul style="list-style-type: none"> ● 他のシフトの動きを知ることで代行をスムーズに行えるようにする他、自身の担当シフト以外の教職員の方からの意見・指摘を知ることができる点で役に立っている。 ● 担当していないシフトにおけるトラブルや、SA 全体に関わる事項を再確認するのに役立つ。また、他の人がどのようにトラブルや変更に対処したか聞ける機会であるため、非常に参考になる。 ● いつ、誰が他のシフトに入っても大丈夫なように備えておくのは大切であり、また他の人が行っている工夫について知ることができるので、とても役に立っています。とくに新規の方には重要だと思います。 | 9 件 |
| SA 全体で、課題に対する解決策や、業務の質向上について検討できる | <ul style="list-style-type: none"> ● 自分が入っているシフトの授業で問題が生じ、そのシフトを担当する SA だけでは解決が難しい場合に、その問題を SA 全体で共有して対応策を練ることができるという点で役に立っています。 ● 業務の振り返りや、問題のあった出来事を共有することで、今後の業務の質を向上させることに役立っていると思います。 | 2 件 |

○ 報告会について、改善を要すると感じる点や、要望はありますか。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|----------------------|---|-----|
| 会議進行方針の改善・毎回の協議内容の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ● (平成 28 年度) 前期で行った「各シフトの振り返り」をグループワークで整理した上で共有する試みは、またやっても良いかなと思いました (もちろん、報告会以前の段階で事前に相談・整理しておくことができるのならそれに越したことはありませんが)。発表前に、そもそもどのような情報を共有すべきかについて話し合うことのできる時間は、必要だと感じるからです。 ● 前期に試験的に取り入れられたグループワーク式の会議進行は大変良かったと思います。以後、進行のタイムスケジュールや、その他の細かな規則を設けて、より有意義な会にしたいです。 | 4 件 |
| 参加率の向上 | <ul style="list-style-type: none"> ● いつも同じメンバーが揃うことが多いので、参加を義務化し、特に新規の方に参加してもらいたい。 | 2 件 |
| 作業スキル共有の強化 | <ul style="list-style-type: none"> ● AV 機器設定の技術向上なども重視して欲しい。 | 1 件 |

[6] SA 制度全般について

○ 現行の業務内容以外に、「このような補助もあってよいのではないか」「こういうこともやってみたい」と思うことがあれば、自由に書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|-----------------|---|-----|
| 支援対象授業の拡大・調整 | <ul style="list-style-type: none"> ● 300名以上の授業は数が限られてくる他、せっかく結構な人数がSAとして勤務しているのにそれが活かされていないとも感じるので、200名くらいの中規模の授業でも担当できるようにして欲しい。また、それができない場合でも、印刷業務の肩代わりなどを行うことで少しでも教員、職員の負担を軽減できるようにしたい。 ● 支援対象を大規模授業に限定せず、教員の希望があれば配置できる仕組みもいいのではないかと思います。制度の大幅な見直しも必要になり、人間的にも厳しい面があると感じました。そこで、まずは100人以上入る教室にSAをつけてみてはどうかと思いました。 | 2件 |
| 補助作業の増加・補助内容の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ● SAが“授業の準備及び補助を目的としている”のならば、AV機器の設定などに限らず、黒板消しや、チョーク等の清掃や補充をすることも、臨機応変にするべきかな、と少し思います。 ● 現在の規定でSAの業務に含まれているかはわかりませんが、業務が少ない時などは、各教室の教卓の下などに常備されているコメントペーパー類の補充などを行っても良いのではないのでしょうか。授業を受けていると、教卓のコメントペーパーが切れていてお困りの先生をたまにお見かけするので。 | 2件 |
| 報告会での検討 | <ul style="list-style-type: none"> ● 経験年数が半年ということもあり、まだ提案は難しいです。ただ、報告会などで、今後のSAのあり方について意見交換できる機会があれば良いと思います（議題にあがるのは個別の授業に関することが多いので）。 | 1件 |

○ SAの活動や業務全般について、今後見直し・改善を要すると思うことがあれば自由に書いてください。

| 項目 | 代表的な回答例 | 回答数 |
|------------------|---|-----|
| 学内におけるSA制度の認知を強化 | <ul style="list-style-type: none"> ● 先生方だけでなく、学生にも、SAとはどのような業務をするものなのかということを知ってもらう必要があると思います。業務規定上、できないこともあるのだと理解してもらうことで、受講生に「なぜSAなのにそんなこともできないの？」と思われてしまうことも減るのではないのでしょうか。その方法としては、たとえばSNSの活用なども挙げられると考えます。 ● SAという制度が学生にあまり認知されていないことに問題があると思います。名称の改定を検討するか、あるいは業務の際につける名札を、今のように「SA」とあるだけではなく、学生であり、かつ「授業補助員」であることを明記してもよいのではないかと思います。 | 3件 |
| 業務の配分・シフト配置などの検討 | <ul style="list-style-type: none"> ● 毎年後期が（前期に比べて配置授業数が少ないことが多く）手すきになる傾向があるため、来年度以降は改善策を考えて欲しい。 | 1件 |
| 支援対象授業の拡大 | <ul style="list-style-type: none"> ● 今後必要なこととしては、対象となる授業や、仕事の範囲を増やすことだと思っています。 | 1件 |

以上

Significance and Potential of "Teacher Assistance" by SA, from the Viewpoint of "Improvement of Sociality of Students": An Analysis of the Student Assistant System at Kokugakuin University

ARAI Daisuke, KOHAMA Ayumu, CHUJO Yutaka

Abstract : The Student Assistant System (SA) was introduced to the educational structure at Kokugakuin University in 2009. Whereas in other universities, student staff often participate in activities helping faculty staff improve the quality of education and providing peer-support in learning, the system at Kokugakuin University has been limited to the provision of assistance for teachers in large-scale classes. The "SA" system has been adopted across Japanese universities after the release of "Hironaka Report" in which student-orientedness through their increasing participation, responsibility, independence and sociality was emphasized. Having this as a background, there is a sceptical view that the "SA" system being "faculty assistance" in which the students basically deal with chores in class, as oppose to the roles in assisting FD or providing peer-support, is not adding valuable skill-set to the students. In this paper, significance of the system at Kokugakuin University is discussed. It first explores the history of the system. Subsequently, the opinions on the influence of the system collected from both the students and teachers will be analyzed. The results demonstrate growing initiatives, responsibilities, sense of belonging, and reflective skills which can be potentially applied to a variety of situations both within and beyond one's campus life.

Keywords : Student Assistant (SA) ; SA system as teacher assistance ; Improvement of social skills ; On-campus internship programs